

	一般的名称	報告の概要
264	クラリスロマイシン	ビノレルピンを投与した非小細胞肺癌患者を対象にクラリスロマイシン併用に関するレトロスペクティブコホート研究を行った結果、グレード3または4の好中球減少がクラリスロマイシン併用群で63.2%、ビノレルピン単独群で27.5%認められ、グレード4の好中球減少発現率はクラリスロマイシン併用群で高かった。
265	オメプラゾール	ピロリ菌感染スナネズミに対しオメプラゾール100mg/kg/dayを6ヶ月間投与した際の胃粘膜の変化を検討した結果、腺癌が6割の個体に認められ、プロトンポンプ阻害剤長期投与により萎縮性胃炎が生じ、腺癌発症を促進する可能性が示唆された。
266	オメプラゾール	妊娠中の胃酸抑制薬の服用と子供のアレルギーの発現について、観察コホート研究を行った結果、妊娠中の母親の胃酸抑制薬の服用により、子供の喘息の発現リスクが高まった。
267	オメプラゾール	地域集団ベースのケースコントロール研究を行った結果、プロトンポンプ阻害剤(PPI)の処方は、コントロール群と比較して、肺炎のリスクを1.55倍増加させた。
268	ノルエチステロン・エチニルエストラジオール	胆道癌患者411例、胆石患者893例、健常人786例を対象に、ホルモンと胆管癌・胆石発生リスクとの関連について集団ベースのケースコントロール研究を行った結果、経口避妊薬使用者において、性ホルモン結合グロブリンEx8+6Gの遺伝子型rs6259と胆道癌および胆石発症との有意な関連性が認められた。
269	ノルエチステロン・エチニルエストラジオール	経口避妊薬の服用と出生時の有害事象についてコホート研究を行った結果、最終月経前30日以内に経口避妊薬を使用している群で、非使用群に比べ超低出生体重、低出生体重及び早産のリスクが増加した。
270	アザチオプリン	アザチオプリン/6-メルカプトプリンの投与を副作用により中止された16症例において、Thiopurine S-methyltransferase(TPMT)及びInosine triphosphate pyrophosphohydrolase(ITPA)遺伝子を解析した結果、TPMT遺伝子は全例がwild typeであったが、ITPA遺伝子の94C>A変異遺伝子頻度は31.3%と、健常人103名における対立遺伝子頻度15%と比較して有意に高頻度であったことから、日本人における副作用発現に、ITPAの遺伝子変異が関係していることが示唆された。
271	ポリコナゾール	肺移植を受けた患者149例を対象に、ポリコナゾール投与による皮膚癌の発症リスクに関する調査を行った結果、扁平上皮癌・基底細胞癌の発生はポリコナゾール投与群で42.9%であったのに対し、抗真菌剤非投与・他抗真菌剤投与群では9.9%であった。
272	オメプラゾール	妊娠中の胃酸抑制薬の服用と子供のアレルギーの発現について、観察コホート研究を行った結果、妊娠中の母親の胃酸抑制薬の服用により、子供の喘息の発現リスクが高まった。
273	オメプラゾール	地域集団ベースのケースコントロール研究を行った結果、プロトンポンプ阻害剤(PPI)の処方、コントロール群と比較して、肺炎のリスクを1.55倍増加させた。
274	リスペリドン	アルツハイマー病の患者において、第二世代抗精神病薬の使用と代謝異常との関連について臨床試験を行った結果、女性、オランザピン投与、クエチアピン投与は体重増加と有意に関連していた。プラセボ群と比較し、オランザピン投与はHDLコレステロールの低下、胴囲の増加に有意に関連していた。
275	ジクロフェナクナトリウム	NSAIDsの過敏症に対し、複数薬剤の機序と関与の情報を得るために182症例を検討した結果、2剤以上のNSAIDsによる症状がある場合(交差不耐性:CI)は71.4%、1剤のみに症状がある場合(選択的応答者:SR)は28.6%であった。関連薬剤は、イブプロフェン、ピラゾロン製剤、アスピリン、ジクロフェナクであった。アナフィラキシーはSRの25%に発現したが、CIでは15%であった。

	一般的名称	報告の概要
276	ジクロフェナクナトリウム	NSAIDsと急性腎不全 (ARF) の関連について症例対照研究を行った結果、NSAIDs使用者ではNSAIDs非使用者に比べてARFを初めて発症するリスクが3倍高く、高用量の使用、心不全の既往、高血圧、糖尿病、過去一年間の入院および受診回数はすべてARFリスクの上昇に関連していた。
277	ジクロフェナクナトリウム	心停止登録者データベースでNSAIDsと心停止のリスクの関連をケースクロスオーバー分析した結果、ジクロフェナク群、rofecoxib群およびセレコキシブ群は、用量依存的に心停止のリスク上昇の有意性が見られた。
278	エストラジオール	浸潤性子宮内膜癌401例とコントロール675例を対象としたネステイドケースコントロール研究において、エストロゲンのみを用いた閉経期ホルモン療法もしくはエストロゲン及びプロゲステリン併用療法は子宮内膜癌のリスク上昇と有意な相関が見られた。
279	エストラジオール	閉経前および閉経後の女性60417例を対象とした、ホルモン補充療法 (HT) と乳癌発症リスクの関連性に関するプロスペクティブコホート研究において、非HT群に比べ、エストロゲン療法およびエストロゲン-プロゲステリン療法群において、投与期間依存的な浸潤性乳癌発症リスクの増加が認められた。
280	クラリスロマイシン	ビノレルピンを投与した非小細胞肺癌患者を対象にクラリスロマイシン併用に関するレトロスペクティブコホート研究を行った結果、グレード3または4の好中球減少がクラリスロマイシン併用群で63.2%、ビノレルピン単独群で27.5%認められ、グレード4の好中球減少発現率はクラリスロマイシン併用群で高かった。
281	アスピリン・ダイアルミネート	アスピリンとナプロキセンの併用による血小板凝集抑制作用について、12例の健康人でクロスオーバー試験を行った結果、両薬剤の併用によりアスピリンの血小板凝集抑制作用が低下した。
282	オメプラゾール	プロトンポンプ阻害剤の併用がクロピドグレルの血小板凝集抑制作用に与える影響を検討するため、クロピドグレルによる治療中に冠動脈血管造影が予定されていた患者を対象とした調査を行った結果、オメプラゾールはクロピドグレルの血小板凝集抑制作用を減弱させたが、pantoprazol、esomeprazolはクロピドグレルの血小板凝集抑制作用に影響を与えなかった。
283	ワルファリンカリウム	ワルファリンとフィブラート系薬剤もしくはスタチン系薬剤の併用による胃出血のリスクについて、312334例のワルファリン投与を受けている患者でケースコントロール試験を行った。その結果、gemfibrozilもしくはシンバスタチンの投与により胃出血による入院のリスクが上昇した。
284	ジクロフェナクナトリウム	心停止登録者データベースでNSAIDsと心停止のリスクの関連をケースクロスオーバー分析した結果、ジクロフェナク群、rofecoxib群およびセレコキシブ群は、用量依存的に心停止のリスク上昇の有意性が見られた。
285	ランソプラゾール	報告施設に3日間以上入院した18歳以上の患者を対象として、胃酸分泌抑制剤 (プロトンポンプ阻害薬 (PPI)、H2受容体阻害薬) の使用による院内肺炎の発現リスクに関してプロスペクティブコホート研究を実施した結果、胃酸分泌抑制剤投与群では、非投与群に比べて高い累積罹患率を示した。PPI投与群では有意な院内肺炎リスクの上昇が示された。
286	酒石酸バレニクリン	FDAが公開している2008年の7-9月の副作用報告によると、バレニクリンの副作用報告数は1-3月、4-6月より減少したが、重篤副作用数は全医薬品中4番目に多かった。他者への攻撃性の副作用数も増えてきていること、けいれんや記憶・視覚障害など交通事故につながる恐れのある副作用も報告されてきていることから、攻撃性や事故の可能性についてさらに注意喚起すべきである。
287	ラベプラゾールナトリウム	報告施設に3日間以上入院した18歳以上の患者を対象として、胃酸分泌抑制剤 (プロトンポンプ阻害薬 (PPI)、H2受容体阻害薬) の使用による院内肺炎の発現リスクに関してプロスペクティブコホート研究を実施した結果、胃酸分泌抑制剤投与群では、非投与群に比べて高い累積罹患率を示した。PPI投与群では有意な院内肺炎リスクの上昇が示された。

	一般的名称	報告の概要
288	レノグラステム(遺伝子組換え)	同種骨髄移植後のG-CSF投与の影響について、GVHDモデルマウスを用いて検討した結果、コントロールマウスに比べ骨髄移植直後にG-CSFを投与されたマウスで急性GVHDによる死亡率が有意に上昇した。
289	塩酸タムスロシン	白内障手術後の高齢男性におけるタムスロシンと重篤な眼有害事象の関連性についてレトロスペクティブコホート研究を行った。その結果、手術14日以内のタムスロシン投与群で、重篤な眼有害事象(網膜剥離、水晶体の損傷・断裂、眼内炎)と有意な関連性が認められた。なお、他の α 遮断薬投与群では有意な関連性は認められなかった。
290	オマリズマブ(遺伝子組換え)	オマリズマブの中等症から重症の喘息患者を対象とした有効性と長期の安全性を評価するため、5041例の本剤投与群と2886例の非投与群を5年間追跡調査した試験において、「死亡の恐れのある心血管・脳血管事象」、「脳血管事象」、「肺高血圧」が重点イベントとして規定された。
291	ノルエチステロン・エチニルエストラジオール	経口避妊薬(OC)の使用と尿失禁の発現について、閉経前女性を対象に多変量解析を行った結果、OC使用者は非使用者と比べて週1回以上の尿失禁のオッズ比が27%高かった。
292	ノルエチステロン・エチニルエストラジオール	経口避妊薬(OC)の使用と全身性エリテマトーデス(SLE)のリスクについてケースコントロール研究を行った結果、OCの使用によりSLEのリスクが増大する可能性が示唆された。SLEの発現は、使用歴の長いOC現使用者に比べ短い現使用者で発症率が高く、また、第一世代及び第二世代のOCの現使用者で発症率が高かった。
293	ノルエチステロン・エチニルエストラジオール	子宮頸癌患者150例、健常女性197例を対象にNijmegen breakage syndrome 1の遺伝子多型(Glu185Gln)を解析し、喫煙、経口避妊薬投与と子宮頸癌の発症リスクに関するケースコントロール研究を行った結果、Glu/Gln遺伝子型を有する経口避妊薬使用者における子宮頸癌発現リスクはコントロール群の2.4倍であることが示唆された。
294	ノルエチステロン・エチニルエストラジオール	経口避妊薬(OC)の使用と女性生殖器官疾患の関連性について、17032例の女性を対象に調査した結果、OCの使用により子宮頸管炎及び子宮頸部びらん(の)リスクを増加する可能性が示唆された。
295	塩酸プラミペキソール水和物	抗パーキンソン病薬による眠気(傾眠)および突発性睡眠について、健康男性被験者12例を対象に睡眠潜時反復試験を行った結果、プラミペキソール投与群は、プラセボ投与群と比べて平均睡眠潜時が有意に減少し、総睡眠時間が増加した。
296	キシナホ酸サルメテロール	持続性の喘息患者の長時間作動型 β 刺激薬(LABA)安全性について、92のランダム化臨床試験を対象にシステマティックレビューを行った結果、LABA単独投与群はプラセボ群に比べ、喘息関連死の有意な増加が認められ、LABA単独投与、吸入ステロイド併用においては、小児・サルメテロール使用患者・12週以上の持続投与患者で重篤な有害事象の発現リスク増加が示唆された。
297	ラフチジン	股関節骨折の患者のうちプロトンポンプ阻害薬(PPI)やH2受容体阻害薬を服用している33,752例を対象に、matched control 試験を行った結果、2年以上PPIの治療を受けた患者では股関節骨折の発現率が対照群に比べて30%高かった。また、2年以上H2受容体阻害薬で治療を受けた患者では股関節骨折の発現率が対照群に比べて18%高かった。
298	ニコランジル	ニコランジルによる上部消化管合併症の発生率について、低用量アスピリン投与を受けている心血管患者907例を対象として後ろ向き研究を行った結果、コントロール群と比較して、ニコランジル投与群はオッズ比が2.13であり、ニコランジル併用によって心血管疾患患者のアスピリンによる出血性十二指腸傷害のリスクが増加した。
299	ノルエピネフリン	ポルトガルのICU入室患者において、敗血症性ショックの死亡率に対する昇圧剤選択の影響を評価した結果、ノルエピネフリンを投与した敗血症性ショック患者の死亡率はドパミンを投与した患者群に比べて優意に高かった。

	一般的名称	報告の概要
300	ジクロフェナクナトリウム	心停止登録者データベースでNSAIDsと心停止のリスクの関連をケースクロスオーバー分析した結果、ジクロフェナク群、rofecoxib群およびセレコキシブ群は、用量依存的に心停止のリスク上昇の有意性が見られた。
301	ノルエチステロン・エチニルエストラジオール	267400例の女性を対象として経口避妊薬(OC)と12種の癌の発生頻度に関してコホート研究を行った結果、OC使用経験者では、子宮体癌発症リスクの減少傾向がみられた一方で、大腸・直腸癌発症リスクの増加が示唆された。
302	ラフチジン	股関節骨折の患者のうちプロトンポンプ阻害薬(PPI)やH2受容体阻害薬を服用している33,752例を対象に、matched control試験を行った結果、2年以上PPIの治療を受けた患者では股関節骨折の発現率が対照群に比べて30%高かった。また、2年以上H2受容体阻害薬で治療を受けた患者では股関節骨折の発現率が対照群に比べて18%高かった。
303	塩酸イリノテカン	イリノテカンによる治療を受けている日本人癌患者135例を対象に、重症な好中球減少の発現とUDP-グルクロン酸転移酵素(UGT)の遺伝子多型の関連性についてプロスペクティブな解析を行った結果、UGT1A1*6と重症好中球減少症との間に有意な関連性が認められた。
304	リン酸コデイン	コデイン投与を受けている授乳婦と授乳を受けている新生児におけるオピオイド毒性についてケースコントロール研究を行った結果、中枢神経抑制作用の見られた新生児は対照群に比べて母親へのコデイン投与量が多かった。また、CYP2D6の代謝機能の高い母親が、UGT2B7*2/*2遺伝子型の場合に中枢神経抑制のリスクは高くなった。
305	ジクロフェナクナトリウム	ジクロフェナクとetoricoxibの長期使用による心血管系またその他のリスクについて骨関節炎患者、関節リウマチ患者でコホート研究を行った。その結果血栓性心血管リスクは同等だったが、ジクロフェナクはetoricoxibに比べ腎血管リスクは低く、消化管・肝臓リスクは高かった。
306	オメプラゾール	股関節骨折の患者のうちプロトンポンプ阻害薬(PPI)やH2受容体阻害薬を服用している患者についてmatched control試験を行った結果、2年以上PPIの治療を受けた患者では股関節骨折の発現率が対照群に比べて30%高かった。また、2年以上H2受容体阻害薬で治療を受けた患者では股関節骨折の発現率が対照群に比べて18%高かった。
307	メトレキサート	再発性頭頸部扁平上皮癌に対するゲフィチニブ、あるいは標準的なメトレキサート静脈内投与による治療の比較試験において、メトレキサート治療群で死亡が認められた。
308	ペバシズマブ(遺伝子組換え)	ペバシズマブを併用したmFOLFOX6療法あるいはFOLFILI療法を行った26例において、レニンアンギオテンシン系薬投与群と非投与群で比較解析を行った結果、ペバシズマブの副作用である高血圧と蛋白尿の発現に有意な差は見られなかった。
309	リン酸コデイン	コデイン投与を受けている授乳婦と授乳を受けている新生児におけるオピオイド毒性についてケースコントロール研究を行った結果、中枢神経抑制作用の見られた新生児は対照群に比べて母親へのコデイン投与量が多かった。また、CYP2D6の代謝機能の高い母親が、UGT2B7*2/*2遺伝子型の場合に中枢神経抑制のリスクは高くなった。
310	インフルエンザウイルス体外診断用医薬品	3つの地域の異なる母集団を対象にインフルエンザ迅速診断キットについて調査した結果、RT-PCR及びウイルス分離培養法と比較し、本製品は全ての集団で感度が低かった。なお、いずれも特異度は高かった。
311	ジクロフェナクナトリウム	腹腔鏡結腸直腸手術後の吻合部漏出発現リスクとジクロフェナクとの関連を、ケースコントロール研究において単変量ロジスティック回帰分析した結果、ジクロフェナクのみが吻合部漏出と有意に関連する要因であった。

	一般的名称	報告の概要
312	ペロ毒素測定用体外診断用医薬品	8施設の医療機関で、陰性検体ペロキシン2の判定ゾーンに偽陽性の報告があった。同一検体について行政検査機関、販売元で再試験を実施したが、陰性を示し問題はなかった。また、原材料及び製造記録についても、全て規格内であり異常は認められなかった。
313	オメプラゾール	股関節骨折の患者のうちプロトンポンプ阻害薬(PPI)やH2受容体阻害薬を服用している患者についてmatched control 試験を行った結果、2年以上PPIの治療を受けた患者では股関節骨折の発現率が対照群に比べて30%高かった。また、2年以上H2受容体阻害薬で治療を受けた患者では股関節骨折の発現率が対照群に比べて18%高かった。
314	塩酸イリノテカン	子宮頸癌6例、子宮癌24例の日本人患者を対象に、イリノテカン・シスプラチン併用療法とUDP-UDP-グルクロン酸転移酵素1A1(UGT1A1)の遺伝子型との関連性について調査した結果、UGT1A1*6のヘテロ接合体の患者においてグレード3/4の好中球減少および下痢の発現に有意な相関が見られた。
315	メシル酸ドキサゾシン	良性前立腺肥大症治療に用いられる α 遮断薬に関連する骨折のリスクについて、685例の患者を対象にロジスティック回帰分析を行った結果、 α 遮断薬の使用により低血圧関連の副作用(失神、転倒、意識喪失)に伴う二次的な骨折のリスクが高まった。
316	インターフェロン ベーター1a(遺伝子組換え)	多発性硬化症(MS)患者の妊娠220例のうち、妊娠初期にインターフェロン β (INF- β)を服用した患者の妊娠17例をプロスペクティブに調査した。その結果流産2例、残る15例は健康体であり、催奇形性リスクは増大せず流産率は健康人の範囲内だった。またINF- β 投与群患者の子の出生時体重は、非投与群の子の出生時体重の範囲内であった。
317	インターフェロン ベーター1a(遺伝子組換え)	日本人の多発性硬化症(MS)患者127人の一次性及び慢性二次性頭痛頻度を調査した。その結果、MS患者の頭痛、特に片頭痛頻度は日本人平均より高く、またMS患者においてはインターフェロン β (INF- β)投与群は頭痛、特に前兆のない片頭痛の頻度が有意に高かった。
318	カベルゴリン	パーキンソン病患者へのドパミンアゴニスト(DA)投与による心臓弁疾患の発現リスクについて、麦角DA(ペルゴリド、カベルゴリン)、非麦角DA(ロピニロール、プラミペキソール)投与群と対照群で評価した。その結果、中等度の弁逆流の発現率は麦角DA投与群で22%、非麦角DA投与群で3%、対照群で0%であった。
319	酒石酸バレニクリン	2008年第4四半期において、FDAのAERSより、バレニクリンでは、血管浮腫、重篤な皮膚反応、視覚障害、事故による外傷のシグナルが検出された。
320	オメプラゾール	腹水の発現している肝硬変患者における特発性細菌性腹膜炎(SBP)の発現とプロトンポンプ阻害薬(PPI)の使用との関連性について、レトロスペクティブなケースコントロール研究を行った結果、SBP群は非SBP群に比べて有意にPPIの使用率が高かった。
321	セレコキシブ	セレコキシブ、rofecoxibおよび非選択的非ステロイド系抗炎症薬(t-NSAIDs)についてMedical Expenditure Panel Survey のデータを用いて解析した結果、セレコキシブ群は急性心筋梗塞とは有意な関連性は認められなかったが、脳卒中および消化管出血と有意な関連性が認められた。
322	塩酸タムスロシン	白内障手術後の高齢男性におけるタムスロシンと重篤な眼有害事象の関連性についてレトロスペクティブコホート研究を行った。その結果、手術14日以内のタムスロシン投与群で、重篤な眼有害事象(網膜剥離、水晶体の損傷・断裂、眼内炎)と有意な関連性が認められた。なお、他の α 遮断薬投与群では有意な関連性は認められなかった。
323	オキサリプラチン	オキサリプラチンによる門脈圧亢進症のマーカーとして脾臓肥大が利用できると推測し、結腸直腸癌切除患者を対象に、術後補助化学療法としてのFOLFOXおよび5-フルオロウラシル/レボホリナートを施行したときの脾指数(SI)をレトロスペクティブに比較したところ、それぞれについてのSIは平均で45.7%および16.3%増加し、FOLFOXは補助的5-フルオロウラシル/レボホリナートに比べ、結腸直腸癌切除患者のSIを有意に上昇させた。

	一般的名称	報告の概要
324	臭化水素酸デキストロメトルフアン	セロトニン取り込み阻害薬(SSRI)はデキストロメトルフアンの主要な代謝酵素であるシトクロムP450CYP2D6を阻害し、セロトニン伝達に対するSSRIとデキストロメトルフアンの相加効果によってセロトニン症候群が生じることが示唆された。
325	リスペリドン	上市から2008年11月30日時点までにHealth Canadaは、オランザピン、クエチアピンおよびリスペリドンの使用との関連が疑われる顆粒球減少症、好中球減少症および無顆粒球症の報告を69件受けている。多くの症例で、併存疾患、併用薬が報告されていた。
326	カベルゴリン	ドパミンアゴニスト(DA)と線維化事象(心内膜線維症、心臓弁逆流、心膜線維症、心膜炎、胸膜線維症、胸膜炎、肺の変化、後腹膜線維症)について不均衡分析を用いて解析した。その結果、線維化事象として報告された9576例うち、268例が麦角DA、24例が非麦角DA、6例が2種類以上のDAと関連していた。
327	カベルゴリン	パーキンソン病患者へのドパミンアゴニスト(DA)投与による心臓弁膜症の発現リスクについてネステッドケースコントロール研究を行った。その結果、ベルゴリドまたはカベルゴリンを投与されている患者では心臓弁膜症の発現リスクが上昇し、さらに高血圧症を有する高齢患者の場合、高血圧症ではない非高齢患者と比較し発現リスクが上昇した。
328	デフェランロクス	FDAから要請を受け、安全性情報に関する再調査を実施した。Exjade Patient Assistance and Support Service(EPASS)システムを利用した16514例における本調査の結果、中止理由が死亡であった1903例を特定した。
329	ジクロフェナクナトリウム	腹腔鏡結腸直腸手術後の吻合部漏出発現リスクとジクロフェナクとの関連を、ケースコントロール研究において単変量ロジスティック回帰分析した結果、ジクロフェナクのみが吻合部漏出と有意に関連する要因であった。
330	エポエチンβ(遺伝子組換え)	血液透析血管アクセス障害におけるエリスロポエチン製剤投与経路の影響を検討する無作為化比較試験において、静脈内投与に比較して皮下投与は血液透析患者の血管アクセス障害のリスクが高い可能性が示唆された。
331	葉酸	男性643例を対象に、葉酸群またはプラセボ群にランダムに割付けた無作為化プラセボ対照臨床試験を行った結果、10年間で前立腺癌と診断される推定確率は、葉酸群で9.7%、プラセボ群で3.3%となることが示された。
332	塩酸イリノテカン	転移性結腸直腸癌患者250例を対象にフルオロウラシル、ロイコポリンおよびイリノテカンの併用療法を行い、UGT1A1*28、*60、*93、UGT1A7*3およびUGT1A7*22の遺伝子多型と重度の血液毒性の関連性を評価したところ、UGT1A7*3/*3において、初回投与後の重度な血液毒性発現が有意に高かった。
333	塩酸イリノテカン	進行性小細胞肺癌患者651例を対象に、エトポシド/シスプラチン(EP)療法とイリノテカン/シスプラチン(IP)療法を比較した第Ⅲ相試験において、重度の下痢(グレード3以上)の発現はIP療法で、血小板減少・好中球減少はEP療法で多くみられた。また、169例の薬理ゲノム解析により、ABCトランスポーターの(C3435T)(T/T)、UDP-グルクロン酸転移酵素1A1の(G3156A)(A/A)は、それぞれIP療法による下痢、好中球減少の発現に関与していることが示唆された。
334	白虎加人参湯	Caなど種々のカチオン金属を含有する白虎加人参湯を用い、カチオン金属とキレート形成するシプロフロキサシン、テトラサイクリンのバイオアベイラビリティ(BA)に対する影響を20人の健康成人男性においてオープンラベル無作為クロスオーバー試験で評価した結果、白虎加人参湯はシプロフロキサシン、テトラサイクリンの尿中排泄には影響しなかったが、Caイオンと不溶性のキレートを形成し、消化管吸収を低下させることでBAを低下させた。
335	ラベプラゾールナトリウム	股関節骨折の患者のうちプロトンポンプ阻害薬(PPI)やH2受容体阻害薬を服用している患者についてmatched control試験を行った結果、2年以上PPIの治療を受けた患者では股関節骨折の発現率が対照群に比べて30%高かった。また、2年以上H2受容体阻害薬で治療を受けた患者では股関節骨折の発現率が対照群に比べて18%高かった。

	一般的名称	報告の概要
336	ロピナビル・リトナビル	抗レトロウイルス剤と心筋梗塞(MI)発現との関連性に関し、個々の薬剤のリスクについて11コホートから33308例のデータを解析した結果、アバカビル、ジダノシンの投与、インジナビル、ロピナビル/リトナビルの累積投与とMI発現リスク増加に有意な関連性が認められた。
337	塩酸タムスロシン	白内障手術後の高齢男性におけるタムスロシンと重篤な眼有害事象の関連性についてレトロスペクティブコホート研究を行った。その結果、手術14日以内のタムスロシン投与群で、重篤な眼有害事象(網膜剥離、水晶体の損傷・断裂、眼内炎)と有意な関連性が認められた。なお、他の α 遮断薬投与群では有意な関連性は認められなかった。
338	オメプラゾール	報告施設に入院した患者の処方について、後向き検討を行った結果、プロトンポンプ阻害薬(PPI)投与によりクロストリジウム・ディフィシレ関連下痢、胸部感染、及び骨粗鬆症の発現が増加することが示された。また、PPIの過剰な処方が明らかであった。
339	オメプラゾール	腹水の発現している肝硬変患者における特発性細菌性腹膜炎(SBP)の発現とプロトンポンプ阻害薬(PPI)の使用との関連性について、レトロスペクティブなケースコントロール研究を行った結果、SBP群は非SBP群に比べて有意にPPIの使用率が高かった。
340	クエン酸クロミフェン	クロミフェン治療を受けた女性と、排卵誘発治療を受けなかった女性を比較して、癌の発生率のハザード比を解析したところ、乳癌、子宮癌、悪性黒色腫、非ホジキンリンパ腫において有意なリスクの上昇が認められた。
341	塩酸タムスロシン	白内障手術後の高齢男性におけるタムスロシンと重篤な眼有害事象の関連性についてレトロスペクティブコホート研究を行った。その結果、手術14日以内のタムスロシン投与群で、重篤な眼有害事象(網膜剥離、水晶体の損傷・断裂、眼内炎)と有意な関連性が認められた。なお、他の α 遮断薬投与群では有意な関連性は認められなかった。
342	塩酸ベラパミル	Tedisamilとベラパミルの薬物相互作用について、12例の健常人を対象に無作為化クロスオーバー試験を行ったところ、プラセボ群と比較し、PR間隔はベラパミル単独投与群で23.6ms、ベラパミル、tedisamil併用群で12.2ms延長した。また、QT間隔はベラパミル単独投与群で13.5ms、ベラパミル、tedisamil併用群で45.7ms延長した。
343	プロポフォール	過去15年間に、プロポフォールが使用された小児及び成人重病患者での原因不明の死亡に関する文献をレビューした結果、集中治療における本剤の長期高用量投与により、Propofol Infusion Syndrome(心筋障害、心臓血管の不安定性、代謝性アシドーシス、高カリウム血症、横紋筋融解症などの症状を呈する症候群)や乳酸アシドーシスの進行を伴った脳エネルギー産生不足の症例が認められた。
344	フタールール	内視鏡消毒剤を使用する医療従事者を調査した結果、アレルギーの既往歴がある作業員においては、非常に低いフタール濃度にも関わらず、フタール暴露によるとみられる症状の発現が認められた結果が示された。
345	酒石酸トルテロジン	FDAが公表したAERSの四半期(10-12月)において、トルテロジンのスティーブン・ジョンソン症候群に対するリスクのシグナルが検出された
346	塩酸メチルフェニデート	興奮薬(アセトアミノフェン、dextroamphetamine、メタンフェタミン、メチルフェニデート)と突然死の関連についてケースコントロール研究を行った結果、7歳-19歳の原因不明の突然死のうち10例(1.8%)は、メチルフェニデートを使用しており、小児および青少年における原因不明の突然死と興奮薬の使用は有意な関連が認められた。また自動車事故死亡者のうち2名(0.4%)が、興奮薬を使用していた。
347	リン酸コデイン	コデイン投与を受けている授乳婦と授乳を受けている新生児におけるオピオイド毒性についてケースコントロール研究を行った結果、中枢神経抑制作用の見られた新生児は対照群に比べて母親へのコデイン投与量が多かった。また、CYP2D6の代謝機能の高い母親が、UGT2B7*2/*2遺伝子型の場合に中枢神経抑制のリスクは高くなった。

	一般的名称	報告の概要
348	塩酸タムスロシン	白内障手術後の高齢男性におけるタムスロシンと重篤な眼有害事象の関連性についてレトロスペクティブコホート研究を行った。その結果、手術14日以内のタムスロシン投与群で、重篤な眼有害事象(網膜剥離、水晶体の損傷・断裂、眼内炎)と有意な関連性が認められた。なお、他の α 遮断薬投与群では有意な関連性は認められなかった。
349	ジクロフェナクナトリウム	名城大学が作成したデータベースをもとに、薬剤性腎障害の多変量ロジスティック回帰分析を行いリスクファクタを解析した。患者背景では、腎障害、感染症、関節リウマチ、原因薬剤ではジクロフェナク、ロキソプロフェン、ブシラミン、ペニシラミン、自覚症状は浮腫、乏尿・尿閉であった。
350	ラベプラゾールナトリウム	健康管理情報データベースを利用し、プロトンポンプ阻害剤(PPI)と胃癌発症リスクとの関連性を調査した結果、PPI投与群及びH2RA投与群は非投与群と比較して胃癌の発現率が有意に高かった。
351	ポリコナゾール	91例の入院患者の血清サンプルを分析し、ポリコナゾールの血中濃度を測定した結果、14例のtemazepam投与患者および9例のロラゼパム投与患者における平均血中ポリコナゾール濃度は、ベンゾジアゼピン系薬物非投与の患者に比べて低値を示した。
352	レノグラステム(遺伝子組換え)	肝障害モデルマウスに対するG-CSF投与の効果について検討した結果、G-CSFの投与により、肝のIL-1 β 産生を介して肝再生を抑制し、致死性の肝障害が引き起こされた。G-CSF群の生存率は50%であり、コントロール群の生存率は82.3%であった。
353	ランソプラゾール	報告施設に3日間以上入院した18歳以上の患者を対象として、胃酸分泌抑制剤(プロトンポンプ阻害薬(PPI)、H2受容体阻害薬)の使用による院内肺炎の発現リスクに関してプロスペクティブコホート研究を実施した結果、胃酸分泌抑制剤投与群では、非投与群に比べて高い累積罹患率を示した。PPI投与群では有意な院内肺炎リスクの上昇が示された。
354	塩酸イリノテカン	転移性結腸直腸癌患者250例を対象にフルオロウラシル、ロイコポリンおよびイリノテカンの併用療法を行い、UGT1A1*28、*60、*93、UGT1A7*3およびUGT1A7*22の遺伝子多型と重度の血液毒性の関連性を評価したところ、UGT1A7*3/*3において、初回投与後の重度な血液毒性発現が有意に高かった。
355	酒石酸バレニクリン	WHO Uppsala Monitoring Center のVigiBaseで本剤を服用した患者でセロトニン症候群を発現した症例が6例認められた。そのうち5例でセロトニン症候群の報告されている抗うつ薬が併用されていた。またセロトニン症候群は本剤の投与量が増量する第二週に集中して認められた。
356	ニフェジピン	妊娠初期における降圧薬の使用と出生児の先天性奇形との関連性について、妊娠初期に降圧薬を使用していた女性1418例を対象にレトロスペクティブなコホート研究を行った。その結果、降圧薬(ACE阻害薬、 β -遮断薬、カルシウム拮抗薬)の使用により心血管奇形のリスクの増加が認められた。
357	オメプラゾール	報告施設に入院した患者の処方について、後向き検討を行った結果、プロトンポンプ阻害薬(PPI)投与によりクロストリジウム・ディフィシレ関連下痢、胸部感染、及び骨粗鬆症の発現が増加することが示された。また、PPIの過剰な処方が明らかであった。
358	プロポフォール	1歳-6歳の小児において、ハロタンおよびプロポフォールと覚醒時興奮発生率の関連について前向き無作為2重盲検試験を行った結果、プロポフォール群はハロタン群に比べて覚醒時興奮の発生率が高かった。
359	塩酸イリノテカン	進行性小細胞肺癌患者651例を対象に、エトポシド/シスプラチン(EP)療法とイリノテカン/シスプラチン(IP)療法を比較した第Ⅲ相試験において、重度の下痢(グレード3以上)の発現はIP療法で、血小板減少・好中球減少はEP療法で多くみられた。また、169例の薬理ゲノム解析により、ABCトランスポーターの(C3435T)(T/T)、UDP-グルクロン酸転移酵素1A1の(G3156A)(A/A)は、それぞれIP療法による下痢、好中球減少の発現に関与していることが示唆された。

	一般的名称	報告の概要
360	塩酸イリノテカン	転移性結腸直腸癌患者250例を対象にフルオロウラシル、ロイコボリンおよびイリノテカンの併用療法を行い、UGT1A1*28、*60、*93、UGT1A7*3およびUGT1A7*22の遺伝子多型と重度の血液毒性の関連性を評価したところ、UGT1A7*3/*3において、初回投与後の重度な血液毒性発現が有意に高かった。
361	オメプラゾール	報告施設に3日間以上入院した18歳以上の患者を対象として、胃酸分泌抑制剤(プロトンポンプ阻害薬(PPI)、H2受容体阻害薬)の使用による院内肺炎の発現リスクに関してプロスペクティブコホート研究を実施した結果、酸分泌抑制剤投与群では、非投与群に比べて高い累積罹患率を示した。PPI投与群では有意な院内肺炎リスクの上昇が示された。
362	ジクロフェナクナトリウム	高齢の変形性関節症患者925人でセレコキシブとジクロフェナクの有害事象との関連について二重盲検比較を行った。有害事象、臨床的異常又は死亡により投薬中止となった患者はセレコキシブで31%、ジクロフェナクでは27%だった。心血管系、腎臓及び肝臓の有害事象はセレコキシブの方が有意に少なかった。
363	ニフェジピン	妊娠中の降圧薬の使用と先天奇形及び子宮内発育遅延(SGA)のリスクについて、61758人の妊婦を対象にケースコントロール研究を行ったところ、対照群と比較し、妊娠中期または後期における降圧薬の使用はSGAの発現リスクと関連が見られた。
364	ロスバスタチンカルシウム	ロスバスタチン(RSV)とtipranavir(TPV)/リトナビル(RTV)との相互作用について、HIV陰性の被験者(男性83%、アフリカ系アメリカ人76%)29例で評価を行った結果、TPV/RTV併用によりRSVのAUCは37%、Cmaxは123%増加し、クリアランスは27%低下した。
365	オメプラゾール	報告施設に入院した患者の処方について、後向き検討を行った結果、プロトンポンプ阻害薬(PPI)投与によりクロストリジウム・ディフィシル関連下痢、胸部感染、及び骨粗鬆症の発現が増加することが示された。また、PPIの過剰な処方が見られた。
366	カペシタビン	55例の転移性乳癌患者を対象に筋肉減少症とカペシタビン投与による毒性発現・腫瘍無増悪期間(TTP)への影響をプロスペクティブに検証した試験において、手足症候群・下痢・口内炎・悪心嘔吐・好中球減少症の発現は、筋肉減少症患者群で有意に高かった。
367	デキサメタゾン	多発性骨髄腫の高齢患者におけるサリドマイド、デキサメタゾンの併用とメルファラン、プレドニゾロンの併用を比較した結果、サリドマイド、デキサメタゾンを併用した患者群では高い寛解率が得られたが、一年死亡率はメルファラン、プレドニゾロンを併用した患者群よりも高く、生存期間は著しく短かった。また、サリドマイド、デキサメタゾンを併用した患者群において、心疾患で9人が死亡した。
368	塩酸タムスロシン	白内障手術を行った患者における術中虹彩緊張低下症候群(IFIS)発症に関連する因子について、患者660例を対象に調査した結果、タムスロシンの使用によりIFIS発症率が増加した。また、過去に α 遮断薬の使用歴のある患者および高血圧症の患者において発症率が高かった。
369	ヒトインスリン(遺伝子組換え)	ドイツで1998年1月～2005年6月に悪性腫瘍がない患者で、糖尿病の初回治療としてヒトインスリン、アスパルト、リスプロまたはグラルギン単独療法を受けたことのある患者のデータをもとにコホート研究を行ったところ、インスリン投与量と癌の間に全体的に相関性が認められ、グラルギンではヒトインスリンと比較して、癌の発現率が高かった。
370	ヒトインスリン(遺伝子組換え)	経口抗糖尿病薬、ヒトインスリンおよびインスリンアナログが固形癌の発症リスクに与える影響を検討するため、62,809例の患者を対象に、メトホルミンまたはスルホニル尿素の単独療法、併用療法、インスリン療法の4群間で比較したレトロスペクティブコホート研究において、スルホニル尿素の単独療法およびインスリン療法はメトホルミンの単独療法と比較して、大腸癌及び膀胱癌の発症リスクが増加した。
371	塩酸タムスロシン	白内障手術後の高齢男性におけるタムスロシンと重篤な眼有害事象の関連性についてレトロスペクティブコホート研究を行った。その結果、手術14日以内のタムスロシン投与群で、重篤な眼有害事象(網膜剥離、水晶体の損傷・断裂、眼内炎)と有意な関連性が認められた。なお、他の α 遮断薬投与群では有意な関連性は認められなかった。

	一般的名称	報告の概要
372	オメプラゾール	健康管理情報データベースを利用し、プロトンポンプ阻害剤(PPI)と胃癌発症リスクとの関連性を調査した結果、PPI投与群及びH2RA投与群は非投与群と比較して胃癌の発現率が有意に高かった。
373	塩酸テラゾシン	良性前立腺肥大症治療に用いられるα遮断薬に関連する骨折のリスクについて、685例の患者を対象にロジスティック回帰分析を行った結果、α遮断薬の使用により低血圧関連の副作用(失神、転倒、意識喪失)に伴う二次的な骨折のリスクが高まった。
374	塩酸ニカルジピン	妊娠初期における降圧薬の使用と出生児の先天性奇形との関連性について、妊娠初期に降圧薬を使用していた女性1418例を対象にレトロスペクティブなコホート研究を行った。その結果、降圧薬(ACE阻害薬、β遮断薬、カルシウム拮抗薬)の使用により心血管奇形のリスクの増加が認められた。
375	ジクロフェナクナトリウム	心筋梗塞、心血管再建又は不安定狭心症により入院した48566人で非ステロイド性抗炎症薬(NSAIDs)の安全性について後向きコホート研究を行った。NSAIDs非服用者に比べ、イブプロフェン、ジクロフェナク、セレコキシブ、rofecoxibにより心血管系リスクは増加したが、ナプロキセンでは増加は見られなかった。ナプロキセンと比べジクロフェナクでは心血管系死亡リスクが増加し、イブプロフェンでは急性心筋梗塞、死亡のリスクが増加した。
376	インターフェロン ベータ-1a(遺伝子組換え)	日本では再発性の視神経脊髄炎(NMO)は、多発性硬化症(MS)の一群と考え視神経脊髄型MS(OSMS)と呼ばれてきたが、NMO/OSMSは、その臨床的特徴とアクアポリン4抗体の存在から、MSと異なる疾患であると考えられた。MSの再発予防に関してはインターフェロンベータ療法は有用性を示すが、NMOに関してはインターフェロンベータの有用性は明らかでなく、むしろ再発の誘発や大脳病変の合併などの報告がある。
377	エポエチンβ(遺伝子組換え)	22例の抗エリスロポエチン(EPO)抗体陽性の赤芽球癆(PRCA)が抽出され、HLAタイピングを実施したところ、抗EPO抗体とHLA-DRB1*09-DQB1*0309の関連が示された。
378	プロポフォール	過去15年間に、プロポフォールが使用された小児及び成人重病患者での原因不明の死亡に関する文献をレビューした結果、集中治療における本剤の長期高用量投与により、Propofol Infusion Syndorome(心筋障害、心臓血管の不安定性、代謝性アシドーシス、高カリウム血症、横紋筋融解症などの症状を呈する症候群)や乳酸アシドーシスの進行を伴った脳エネルギー産生不足の症例が認められた。
379	オメプラゾール	報告施設に3日間以上入院した18歳以上の患者を対象として、胃酸分泌抑制剤(プロトンポンプ阻害薬(PPI)、H2受容体阻害薬)の使用による院内肺炎の発現リスクに関してプロスペクティブコホート研究を実施した結果、酸分泌抑制剤投与群では、非投与群に比べて高い累積罹患率を示した。PPI投与群では有意な院内肺炎リスクの上昇が示された。
380	塩酸イリノテカン	イリノテカンによる治療を受けている結腸直腸癌患者96例を対象とした、UGT1A1*28及びc.-3156G>Aの遺伝子多型と重度の下痢との関連に関するプロスペクティブコホート研究において、UGT1A1*28を2コピーもしくはc.-3156G>Aを2コピー有する患者において下痢のリスクが有意に高かった。
381	エポエチンβ(遺伝子組換え)	マウスにエリスロポエチン製剤を投与したところ固形腫瘍が増大した。エリスロポエチン製剤は血管新生を亢進させることにより固形腫瘍を増大させることが示された。
382	乾燥ヘモフィルスb型ワクチン(破傷風トキソイド結合体)	1950-2008年に報告された学術論文、米国医学研究所におけるレビュー、1990-2007年にアメリカワクチン有害事象報告システムに報告された副反応情報を調査した結果、ヘモフィルスb型ワクチンによるGBSが5例報告されていることが確認された。
383	エストラジオール	50-70歳の16,608症例の多民族の更年期女性を対象とし、肺癌発現率および死亡率に関して、結合型ウマエストロゲン-酢酸メドロキシプロゲステロン併用連日投与のWHI(Women's Health Initiative)無作為化プラセボコントロール試験の二次分析を行った結果、5年以上の結合型ウマエストロゲン-酢酸メドロキシプロゲステロン併用使用により、非小細胞肺癌の死亡リスクは増加することが示された。

	一般的名称	報告の概要
384	塩酸ピリドキシン	低用量ピリドキシンと神経毒性との関連について、2008年5月から10月の間に感覚ニューロパチーを訴えた患者8例を対象に診断的評価を行った結果、全ての患者においてピリドキシンを含有するOTCサプリメントを服用しており、8例中6例で異常所見が認められた。ピリドキシンの血漿中濃度が高いことを除いて原因は不明であった。
385	塩酸セルトラリン	1298例の乳癌患者を対象に、CYP2D6阻害活性を有する薬剤とタモキシフェンの併用と、乳癌再発率との関連性をレトロスペクティブに解析した結果、タモキシフェン単独群に比べ、CYP2D6阻害剤併用群で2年間乳癌再発率が1.9倍高かった。CYP2D6阻害剤併用群のうち、中程度-強力なCYP2D6阻害作用を有する選択的セロトニン再取り込み阻害剤(セルトラリン・パロキセチン・fluoxetine)併用群の乳癌再発率はタモキシフェン単独群の2.2倍であった。
386	塩酸タムスロシン	白内障手術中の術中虹彩緊張低下症候群(IFIS)の発症とタムスロシンの使用との関連性について、白内障手術を受ける患者579例を対象に調査した結果、IFISを発症した患者15例のうち12例(80%)がタムスロシンを服用していた。また、タムスロシンを服用していた患者23例のうち12例(52%)がIFISを発症した。
387	塩酸ペラパミル	P-糖タンパクの基質であるフェキソフェナジンとP-糖タンパク阻害剤であるペラパミルの薬物相互作用について、12例の健康人(日本人)を対象に無作為化交差試験を行った。その結果、併用によりフェキソフェンジンのR(+)体とS(-)体のAUCがそれぞれ2.2倍と3.5倍に増加した。
388	リツキシマブ(遺伝子組換え)	182例のリンパ腫患者を対象に、リツキシマブ併用化学療法における低ガンマグロブリン血症と非好中球減少性感染症との関連性について調査した結果、136例のリツキシマブ併用群のうち、17例の重度低ガンマグロブリン血症が認められた。
389	ロキシシロマイシン	ロキシシロマイシンを投与された患者において、可逆性後白質脳症の主徴である痙攣発作、視力障害をきたし、MRIにおいて後白質の障害を示す画像所見が得られた症例が2例認められた。
390	オメプラゾール	健康管理情報データベースを利用し、プロトンポンプ阻害剤(PPI)と胃癌発症リスクとの関連性を調査した結果、PPI投与群及びH2RA投与群は非投与群と比較して胃癌の発現率が有意に高かった。
391	硫酸マグネシウム・ブドウ糖	高容量硫酸マグネシウムと神経発達細胞のアポトーシスの関連について、仔マウスに250mg/kgまたは生食を投与した。生後3、7日の投与群では、脳細胞のアポトーシスが誘引され、生後14日の投与群では誘引されなかった。
392	ケトプロフェン	65歳以上の認知症に罹患していない2736人において、非ステロイド性抗炎症薬(NSAIDs)と認知症及びアルツハイマー型認知症(AD)との関連について人口コホート研究を行った。高用量NSAIDs使用者では、認知症のハザード比は1.66、ADのハザード比は1.57に上昇した。
393	ミコナゾール	ミコナゾールを含む52種類の薬剤について、クロザピンの代謝への影響をラットの肝ミクロソームを用いて検討した結果、ミコナゾールはクロザピンの代謝物であるデスメチルクロザピンの生成をコントロールに比べ97%抑制した。
394	塩酸パロキセチン水和物	パロキセチンを投与した成人男性を対象に、血清ホルモンレベル、精液分析、精子の断片化、性功能評価質問票について検討した結果、精子の断片化の平均値は、パロキセチン投与により有意に増加した。35%の男性に勃起機能の有意な変化、47%の男性に射精困難が認められたが、投与中止後回復した。
395	アトルバスタチンカルシウム水和物	IFNβ-1aによる治療で安定している再発寛解型多発性硬化症(MS)患者へのアトルバスタチン併用投与においてプラセボと比較した。結果、併用投与はMS活性リスクを増大させ、新規MS病変発現と臨床的再発が有意に高かった。

	一般的名称	報告の概要
396	乾燥水酸化アルミニウムゲル	ダサチニブと制酸剤が同時に投与された場合、ダサチニブのCmaxは58%、AUCは55%減少したが、ダサチニブの2時間前に制酸剤を投与した場合、ダサチニブの暴露に変化は見られなかった。
397	アスピリン・ダイアルミネート	シロリムス溶出性ステント留置手術後にアスピリン及び低用量チクロピジンの併用療法を受けた日本人2054人において、心血管系の有害事象を1年間追跡調査した。心血管イベントは7.3%で、血液透析は心臓死及び心筋梗塞、標的病変血行再建術の危険因子であった。
398	リン酸オセルタミビル	7日齢の幼若ラットにオセルタミビルを単回経口投与したところ、中枢神経系特異的な行動所見は認められなかった。血液および脳におけるオセルタミビルおよびオセルタミビルカルボキシレート濃度を測定した試験では、幼若ラットは成熟ラットと比較して、オセルタミビルで2.3倍、活性代謝物で4.4倍であった。
399	セレコキシブ	腺腫予防に対する本剤の有効性および安全性を検証する試験において、アテローム硬化性心疾患を有する患者において本剤投与群で心血管および血栓のリスクが高まることが示唆された。
400	塩酸ニロチニブ水和物	塩酸ニロチニブ水和物を少なくとも一度は投与しており、死亡のために再投与されなかった例は15例あり、そのうち13例は原病進行による死亡であった。メシル酸イマチニブ使用症例において投与中止の理由が死亡であるものは126例であった。
401	フマル酸ビソプロロール	妊娠初期における降圧薬の使用と出生児の先天性奇形との関連性について、妊娠初期に降圧薬を使用していた女性1418例を対象にレトロスペクティブなコホート研究を行った。その結果、降圧薬(ACE阻害薬、β-遮断薬、カルシウム拮抗薬)の使用により心血管奇形のリスクの増加が認められた。
402	メトレキサート	1999-2008年のニュージーランド保健省の全国ミニマムデータセットを用いて、メトレキサートによる間質性肺炎の発症と緯度との関連性を調査したところ、緯度1度の増加あたり、MTXによる間質性肺炎の発現率が16%上昇することが示された。
403	インスリン グラルギン(遺伝子組換え)	ドイツで1998年1月～2005年6月に既知の悪性腫瘍がない患者で、糖尿病の初回治療としてヒトインスリン、アスパルト、リスプロまたはグラルギン単独療法を受けたことのある患者のデータをもとにコホート研究を行ったところ、インスリン投与量と癌の間に全体的に相関性が認められ、グラルギンではヒトインスリンと比較して、癌の発現率が高かった。
404	インスリン グラルギン(遺伝子組換え)	インスリンの処方を受けた患者114,841例を追跡し悪性腫瘍の発現率を2年間観察したところ、インスリングラルギン単独使用者では他のインスリン使用者と比較して乳癌リスクが高かった。また、他のインスリンを併用しているインスリングラルギン使用者で他のインスリンを併用している者に関しては相対リスクに差がなかった。
405	クラリスロマイシン	10例の健康人を対象に、クラリスロマイシンのトラゾドン・ゾルピデムに対する薬物動態学的・薬力学的相互作用について調べた結果、クラリスロマイシンとトラゾドンの同時投与によって、トラゾドンのAUC、Cmaxの上昇と半減期の延長が生じ、トラゾドンの作用が強くなることが示された。
406	インスリン グラルギン(遺伝子組換え)	経口抗糖尿病薬、ヒトインスリンおよびインスリンアナログが固形癌の発症リスクに与える影響を検討するため、62,809例の患者を対象に、メトホルミンまたはスルホニル尿素の単独療法、併用療法、インスリン療法との4群間で比較したレトロスペクティブコホート研究において、スルホニル尿素の単独療法およびインスリン療法はメトホルミンの単独療法と比較して、大腸癌及び膵癌の発症リスクが増加した。
407	インスリン グラルギン(遺伝子組換え)	スコットランドにおける糖尿病臨床データベースを使用したコホート研究において、インスリングラルギンのみを使用した患者群では他のインスリンのみを使用した患者群に比べて癌発生率が高く、特に乳癌発生率が高かった。一方、インスリングラルギンを他のインスリンと併用した場合の癌発生率はグラルギン非使用群よりわずかな低値を示した。